

# 国宝・重要文化財 美術工芸品の修理

文化庁文化財第一課



## 絵画



紙、絹、板、漆喰などに墨や絵具を使って表現されたもので、掛軸、卷子、屏風、襖、額などの形状に表装されたものが大多数を占めます。

## 彫刻



仏像、神像、肖像、仮面などの立体造形で、素材的には金属造、乾漆造、かんしつづり 塑造、石造などに大別されますが9割以上が木造です。

## 工芸品



金工、漆工、陶磁器、染織、刀剣など、材質的・構造的にも多種多様で、用途も実用品から宗教用具まで多岐にわたります。



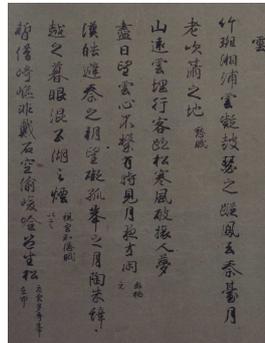
文化財保護法における美術工芸品は、動産文化財のすべてを指しています。絵画・彫刻・工芸品・墨跡・古文書など、それらの多くは美術品や信仰の対象、あるいは持ち主の由緒を証明する品として、大切に保管されて伝えられたものです。

しかしそればかりではなく、行政機関や民間に保管される文書や、科学技術の研究開発に関わる記録など、近代日本の歩みを物語るさまざまな資料も、近年その重要性に対する認識が高まっています。

## - 多彩な美術工芸品 -

近代の資料には放っておくと廃棄されてしまいかねないものも多く、広く調査を行ってその価値を把握する必要があります。

また写真や機械なども美術工芸品指定の範囲に含まれます。これらの保存は、きめ細やかな手仕事を主体とした美術工芸品の保存方法にはなじみません。あらたな考え方や方法が整備される必要があります。



## 書跡・典籍 古文書

書跡は、名筆、墨跡などの書道史上の優品が中心です。典籍は、漢籍、図書、仏典、洋本に大別され、仏典関係が多数あります。古文書は、古記録、制札、棟札類、系図、絵図に大別されます。

## 考古資料



土器、石器、金属器、陶磁器などが中心で、学術的に価値の高い遺跡の出土品が一括指定されています。

## 歴史資料



歴史を考察する際に必要な資料で、文字史料(書跡・典籍、古文書)以外の学術資料や、歴史上の事象や人物に関する、分野を横断する資料群も対象となります。

## 美術工芸品の修理とは

**美**術工芸品の大半は屋内に保管され、普段はしまい込まれているものも多いため、損傷が進行しているものも気付かれにくいという問題があります。またそのままにしても日常生活に支障があるわけではないので、たとえ気付いても、保存修理を行うのをつい後まわしにしがちです。

しかし一見それほど危険な状態にみえなくても、損傷は、言ってみれば水面下で静かに進行しています。日本の美術工芸品はもともと木や紙、絹など、材質が脆弱で、経年により強度が失われています。さらに温湿度の変化、虫やカビなどの発生が損傷劣化を促進します。手を触れることもためられるような、危険な状態の品が数多く存在し、保存修理を待ち続けています。

こうした事態に対処するため、文化庁文化財第一課では国庫補助事業として実施する保存修理のために予算枠を設け、修理の実施にあたっては企画段階から文化財調査官が指導助言を行うなど、所有者による修理事業を支援しています。

### 修理の種類

#### 応急修理

表面が荒れて、鑑賞性が低下したり、取り扱いに不具合が生じた際に行う処置。浮いてきた絵の具を押さえたり、表面に生えたカビを除去したりするメンテナンス作業が中心。通常10年～20年の周期で必要となってきます。



注射針で糊成分を注入し、表面の浮きを押さえる。



伝統的素材を使って絵の具の剥落止めを行う。



絵の裏に当てられた古い補強用の紙を少しずつ取り除く。



解体してお像の中の納入品を取り出す。

#### 本格修理

損傷が構造部分にまで及んだ際に、解体して各部材を補修し、全体の補強を行うもの。本紙を支える補強用の紙(裏打紙)を取り替えたり、部材の欠失部分を補ったりします。多くは50年～100年の周期で行います。

### 修理の流れ

#### 事前の協議

修理に先立ち、所有者・地方公共団体担当者・修理技術者・文化庁職員らが集まって、修理方針、費用負担、修理後の管理方針などについて入念な協議を行います。



所有者や関係者が集まって事前協議を行う。

#### 修理の着手

修理の最初に文化財を適切な修理施設まで運びます。また、作業の前にさまざまな科学的調査を行い、使われている材料や構造の把握などに役立てます。



蛍光X線による材料の非破壊調査。

#### 修理の確認

修理が始まってからも、修理箇所を見ながら所有者や関係者による進捗状況の確認が行われます。新たな歴史的事実が分かり、方針に変更が加わることもあります。



修理の途中で、修理方針を協議・確認する。

#### 修理の完了

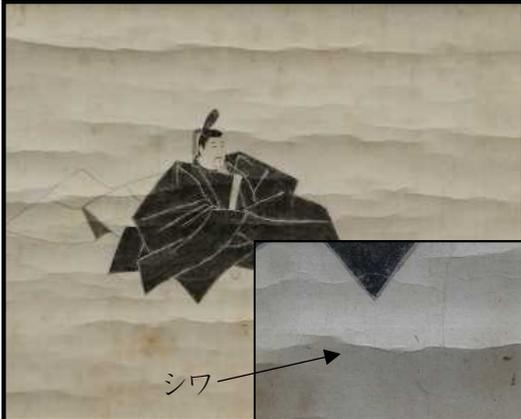
修理完了後は、元の場所に戻され、さまざまな形で公開活用等が行われます。修理の内容については、記録を取り、報告書を作成し、将来の修理に備えます。



修理完了後、お像を所有者の元に返却する。

## ■ 修理の事例

**美**術工芸品の修理技術は、掛け軸や巻物などの表具法を発展させた「装潢(そうこう)修理技術」、仏像の造り手である仏師により伝えられた技術を基本とした「木造彫刻修理」などが代表的です。微細な断片もおろそかにせず、材質のもつ肌合いを変えず、また人の手により伝えられ歴史的痕跡を消さないよう配慮して仕上げるその技術は、外科手術にもたとえられる、たいへん繊細で高度なものです。ここでは美術工芸品の各分野における、最近の修理事例をご紹介します。



シワ

### 絵画

修理前の画面は、シワやシミだらけ。汚れを取り、シワを伸ばす作業を丁寧に行い、美しい画面をよみがえらせました。

➡

現在は、鎌倉時代の人物画の繊細な筆遣いを鑑賞することができます。



修理前
重要文化財「紙本著色藤原元真像(佐竹本三十六歌仙切)」の保存修理
修理後



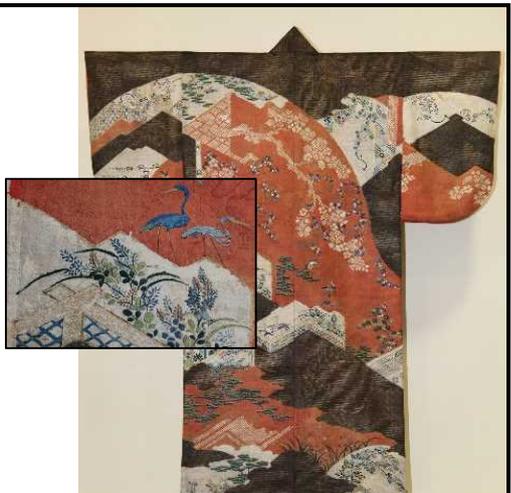
破れ

### 工芸品

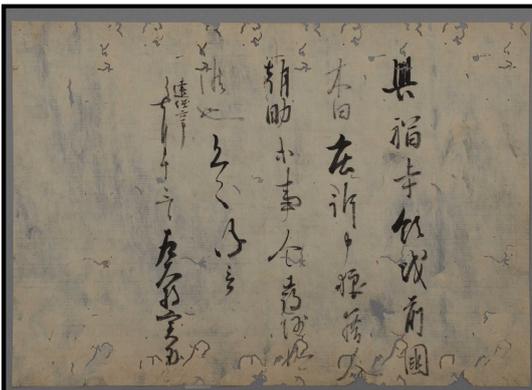
修理前は、生地が弱り、至る所に破れやほつれが発生していました。

➡

破れた箇所を一つ一つ繕い、補強するための別布を当てたことにより、鮮やかな文様と繊細な刺繍技術を鑑賞できるようになりました。



修理前
重要文化財「縫箔風景四季花文小袖」の保存修理
修理後

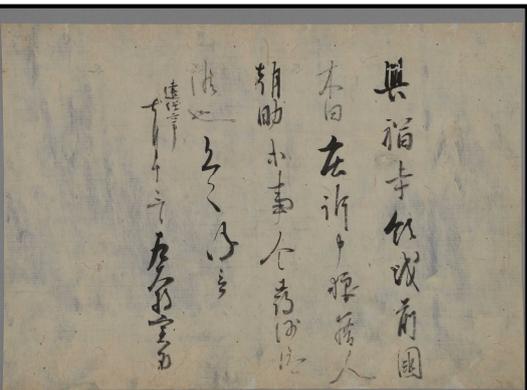


### 古文書

虫食いがひどく、触ると穴の周囲から損傷が広がる恐れがありました。

➡

穴を一つ一つ補修用の紙で埋めたことで、触っても損傷が広がらないようになりました。



修理前
「源実朝書状」の保存修理
修理後

# 重要文化財「木造四天王立像」の保存修理

## 修理の概要

四天王立像は平安時代に造られた檜材、割矧造(わりはぎづくり)、彩色、漆箔(しっばく)仕上げの像です。

主な損傷状況は以下の通りでした。

- ・像全体に埃が付着する。
- ・漆塗り及び彩色が浮き上がり、剥落が進行。
- ・各部材の継ぎ目が緩み、隙間が生じる。
- ・足柄(ほぞ)の収まりが緩く像の立ちが不安定。

今回の修理では、多聞天立像(たもんでんりゅうぞう)のみ体部の部材の継ぎ目が緩んでいたため全解体を行いました。他の像に関しては部分解体のみ行っています。ここでは多聞天立像の修理内容を紹介します。

## 像内調査(ファイバースコープ)



像内の構造等を可能な限り事前にファイバースコープを用いて調べる。

## 剥落止め



表面に付着した埃を刷毛や筆等で除去し、浮き上がった彩色層の剥落防止に紙を仮貼りする。その上からふのり・膠(にかわ)等を浸透させ、剥落止めと同時に汚れを吸着させる。

## 解体



右肩取り外し



鎧(かすがい)取り外し



頭部楔(くさび)入れ



解体後



前後材分離



頭部前面取り外し



割足解体

## 組み付け



それぞれの部材を再び取り付け、組み立てる。

## 補足



木目の方向も考慮して補足した後、周囲の色調に合わせて古色仕上げを行う。



修理前

### 考古資料

修理前は、失われた箇所がそのままとなり、当初の形が分からない状態でした。



脆い断片を強化した上で組み合わせ、失われた部分を補って、当初の形をよみがえらせました。



修理後

重要文化財「家形埴輪(美園古墳出土)」の保存修理



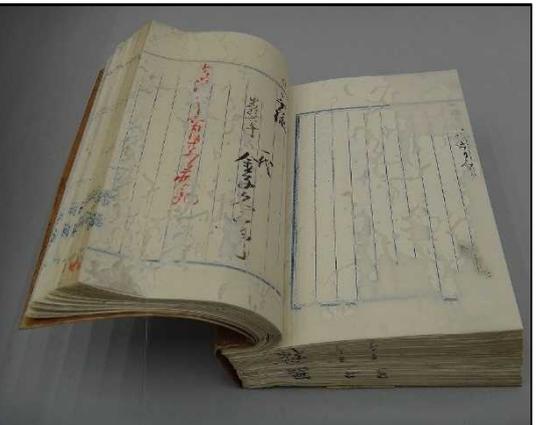
修理前

### 歴史資料

近代行政文書は多種多量で、開くことが難しいほど劣化した資料もあります。



修理では、劣化した箇所に適切な補強を行い、閲覧可能な状態を取り戻しました。



修理後

重要文化財「山口県行政文書」の保存修理

## 世界最先端の修理技術

日本の修理技術者たちは、何百年もの歴史を誇る修理技術に最先端の科学的視点を取り入れ、科学と伝統を融合した修理を行っています。高性能の機械を用いて損傷を診断し、様々な道具を駆使して修理を行う姿は、まさに優秀な外科医のよう。実際に医療用のCTスキャンや顕微鏡を用いて修理を行うこともあります。こうした修理技術は、世界中の注目を集めており、日本で経験

を積んだ技術者たちが、アジア・ヨーロッパ・北米など世界各地の修理の現場で活躍しています。また、これらの修理技術は、ユネスコの無形文化遺産の提案候補にも挙げられています。日本の美術工芸品修理の技術は、まさに世界最先端と言っても過言ではないでしょう。我々は、この最先端の技術によって、美術工芸品を未来へと伝えていくのです。



顕微鏡を見ながらミクロの世界で汚れを除去する。



CTスキャンを使ってお像の内部を撮影する。



発行:文化庁文化財第一課  
印刷:ヤマノ印刷株式会社  
協力:一般社団法人国宝修理装飾師連盟  
公益財団法人江川文庫  
公益財団法人静嘉堂  
公益財団法人美術院  
山口県

---

<http://www.bunka.go.jp>  
© Agency for Cultural Affairs 2018